【文化としての住まいを考える】

住宅建築

2

2018 NO.467

第467号／平成30年2月1日発行
隔月刊年6回（偶数月）1日発行

安息の居場所を刻む

益子義弘の仕事

裏磐梯の小ホテル[ホテリ・アアルト]
裏磐梯のロッジ[アアルトロッジ]
喜多見の家
成城学園の家
上野桜木の家

【特別記事】SEKI DESIGN STUDIO のつくる住まい——素のものの魅力／代々木上原の家／Seki house

森と人と建築と【第7回】Part1:森に住むという理想——落合俊也／Laki Senanayake／Art and Forest

特集

安息の居場所を刻む
―益子義弘の仕事―

保養所を改修し、癒しの空間へ

裏磐梯の小ホテル
【ホテリ・アアルト】

福島県耶麻郡北塩原村
設計＝益子義弘・河合俊和・大竹慎太郎
施工＝八光建設
写真＝傍島利浩

長く設計に関わりながら、建築を通してぼくらは何が果たせるのかと今なお思案する。物を組み立て、空間を拓くうえでの視座や、その基盤や原点はどこにあるのかと考える。

いま地球を素早くめぐる情報のなかで、世界の各地から伝わる多様な文化の混成が日々の常態になって久しい。自分の視座や感性もそうしたなかで折々に共感のありかを探り、身につけてきたものだ。この自然や風土に培われてきた和の文化や、そこで醸成された設えの数々を尊く思い、また惹かれながら、でも純粋にその様態に立ち戻ることはない。根にあるものを体質に引き継ぎつつ、それも現代の多面的な視野や知恵のひとつになっている。

いま日常がそうあるように、住まいのデザインもそうした多様な文化の混成をもととしたなかにある。さまざまな出会いに、住む人の時間や経験、趣向に想像をめぐらせ、互いの思いの交点や心の琴線に触れるものを掬いだしながら、着地する土地の自然に適う場所のありように新たな形質を見出そうとする。

心安らぐ居場所……それが住まいの芯であり、取り組みの命題だろう。多様にあるその安らぎのかたちに自分なりの想像を向け、住まいづくりの視野の重心をそこに置く。

強い表現に囲まれた中では、目はひと時それを楽しんでも心は長く遊ばない。居場所の芽を植える、その土壌を耕し苗床をつくる感じとでも言おうか。あまり場を規定しすぎることなく、日々を過ごしてゆく時間のなかで育つようなそのありようはないかと考える。

人と人の間合いを生む適度な広がり。開放や囲み。明暗の度合いや視界の方位。細部の造りに手を進める前の、そうした心地を支える空間の骨格に目を凝らす。その骨格の見据えのなかに、安息の居場所を刻む。

益子義弘

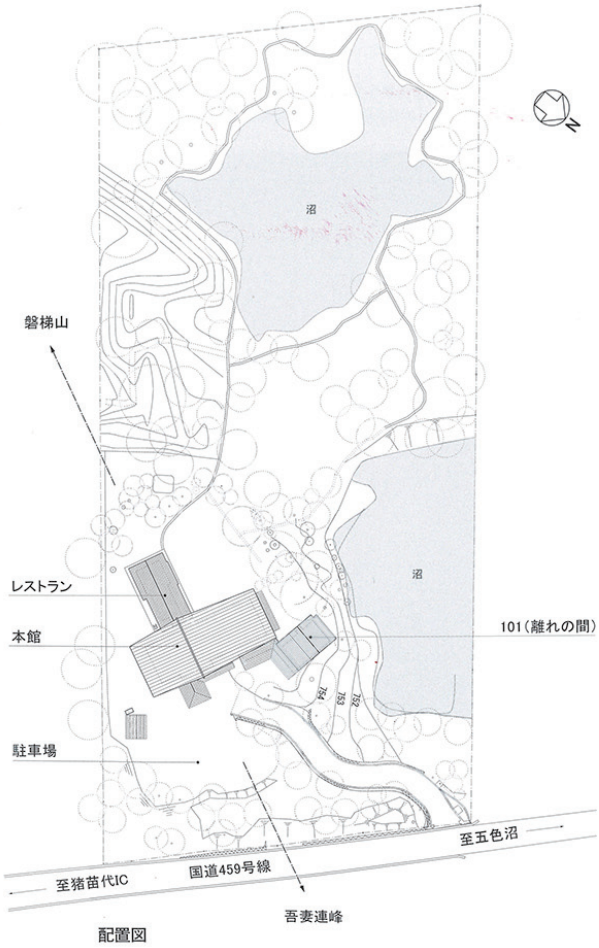
磐梯山の大噴火は130年前。山の頂が吹き飛び、降り落ちた大量の火山灰や岩石に堰止めされた水流が一帯に多くの湖沼群を生んだ。資料を読むとその噴火で焼けた山に営々と木々の苗を植え続けた人がいるという。いま見る深い森は自然の回復力とともに、そうした人たちの営為にもよると聞く。

この小ホテルはそうした湖沼群の一つ、五色沼の近くにある。かつて某企業が自社の保養所として建てたものをその後A市が受け、それを建設業を営む現オーナーが引き取って新たなホテルにしたいと構想した。

相談を受けて現地を訪れた時、築40年を経たその施設はかなり荒れた印象だった。でも躯体を点検するといくらかの補強を施せば十分に持続使用が可能だ。建築全体のシルエットも環境に適った控えめなものに思われ、この骨格をもとに新たな空間に蘇生させる計画に向かうことにした。

ホテルはひと時の安らぎの場だ。長く住まいの設計に関わりながら、短期の充足に供するホテルに取り組むのは初めてのことだった。オーナーのM氏も以前からその希望を持ちながら経営に携わるのは初めてである。施設を前にして、運営と計画、建設メンバー一体のチームで検討を繰り返した。

設計上の基本は既存の骨格を可能な限り活かすこと、できれば柱もできるだけ動かさず新たな空間の設えに読み変えてゆく。その設計はパズルを解くように難解ではあったが、結果的に13の客室はすべて間取りの異なる構成となった。たぶん新築ではこうはいかず、標準を定めるか逆に変化をつけようとすれば作為が目立つものとなっ



配置図

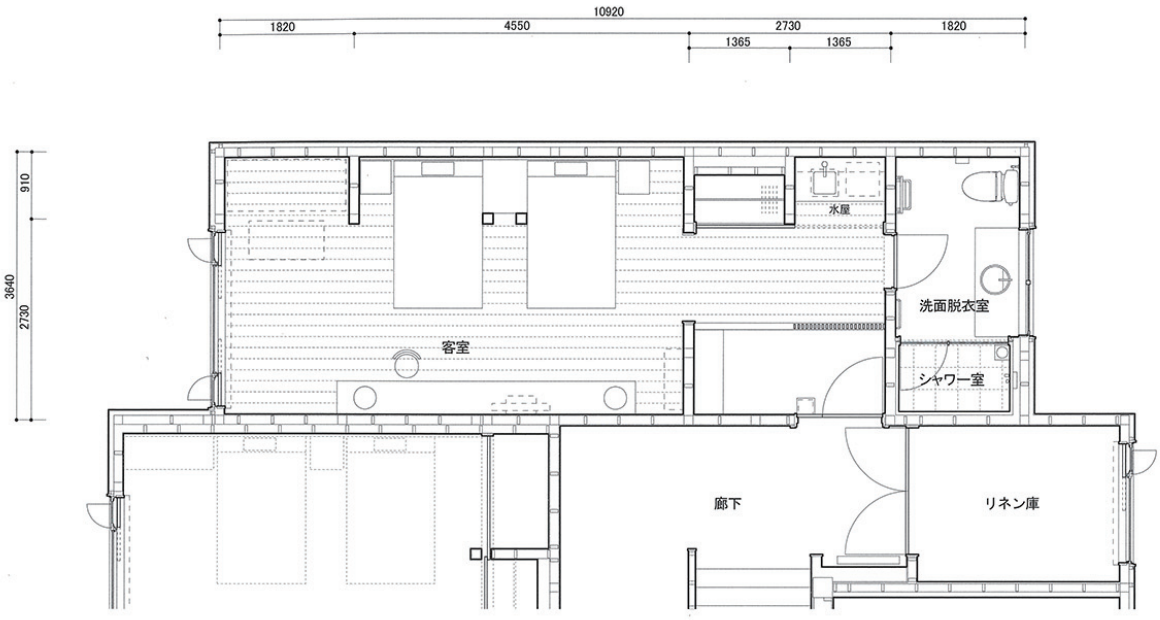
4頁～5頁写真／敷地内の湖沼の畔、散策のなかでそっと佇む居場所を置く

右写真／ラウンジスペース。元は地階倉庫だった天井高の低いスペースを、梁を躱（かわ）しながら上部に余白をつくり、スギの細木を集成した木板で天井を張った
上写真／夕景の南面外観。手前は既存部に増築したレストラン

たかもしれない。それは改修という取り組みのなかで得た新たな経験でもあったし、また実行上での建設チームの柔軟な対応力によるものだ。

全体にわたって心がけたのは、デザインを際立てさせず、環境と呼吸し合う自然な安らぎの空気感をいかに生み出せるかを皆の共通の目標にした。その点で構成や造りの確度には気をつけながらも、ジャズのセッションのように即興的に現場で施した場面も多々ある。それが内部の印象に適当な緩みの効果を生み出したかもしれない。

ホテルは竣工して8年の時が経つ。開業して2年目に東日本大震災が起き、施設は耐えたものの福島全域の放射能害の風評を受け、この一帯もしばらく閑散とした。でもさいわいに繰り返し訪ねてくれる方たちやその後の居心地の評価も広がり、いまはかなり活気を取り戻している。竣工当初の生な素材群も少しずつ鎮まりを見せ、ひとつの空気感を醸し出しつつある。　益子義弘



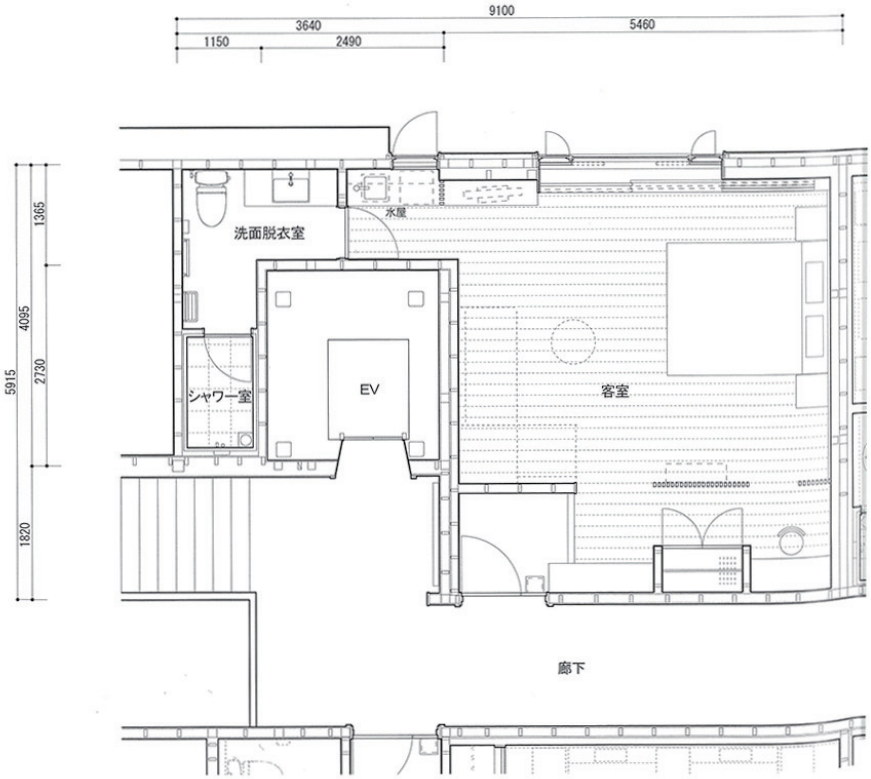
201室　平面図　1/100

右下写真／3階客室廊下。小屋高を生かして天井を高くし、ギャラリーとしても使う
中下写真／3階への階段
左下写真／201室入口。脇の小扉に夜食を差し入れるボックスを付けている

上写真／201室。元は小屋裏の管理人室だった部分。低い小屋高を部屋の落ち着きに生かそうと考えた
右下写真／水屋のコーナー
中下写真／既存の柱を一切外さず、居場所の区分に生かす
左下写真／化粧室。共用の温泉室が館内にあり、各客室にはシャワー室を設置している

右頁写真／304室。最上階の小屋高を室構成に生かす。室内は漆喰塗りとし、やわらかな光の空間に落ち着きを得たいと曲面の天井とした。窓は既成の縦滑り出しアルミサッシを用い、両袖に小格子戸を付けて通風を取り景色のグレアを防ぐ働きを持たせた
上写真／客室各室とも場の軽い区分に格子を用いている

304室入口



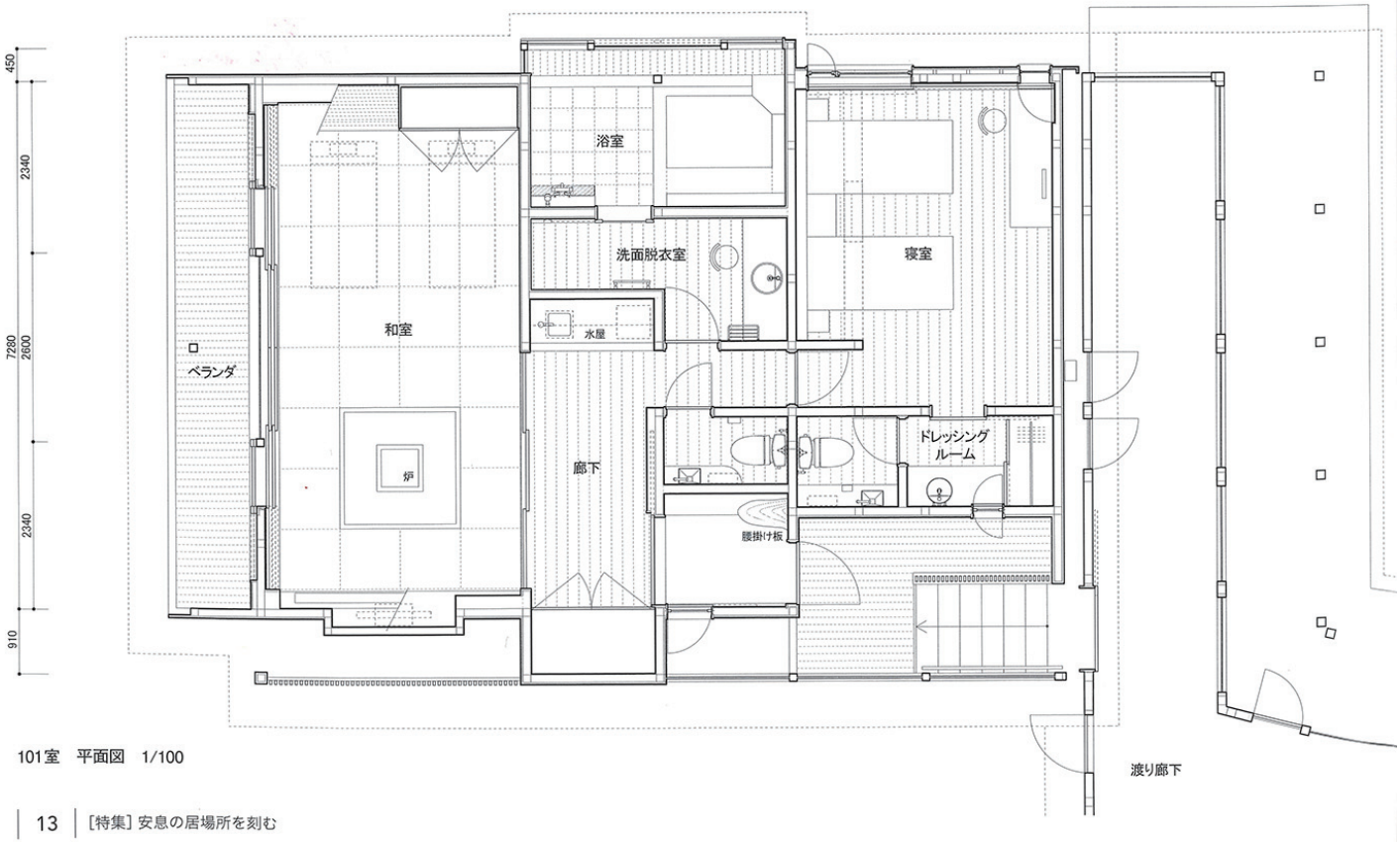
304室　平面図　1/100

上写真／湖沼の風景に向く101室の畳敷き広間。床座と椅子座を併用している　下写真／奥の寝室。窓の遮光用に襖戸を添えた

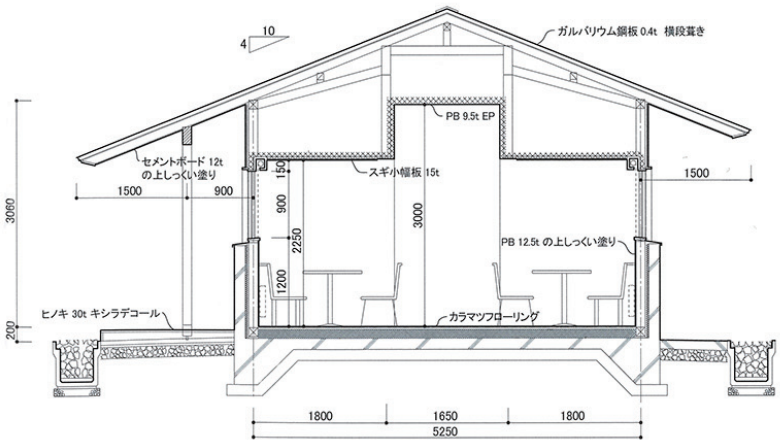
離れの101室に向かう通路

付属の温泉浴室

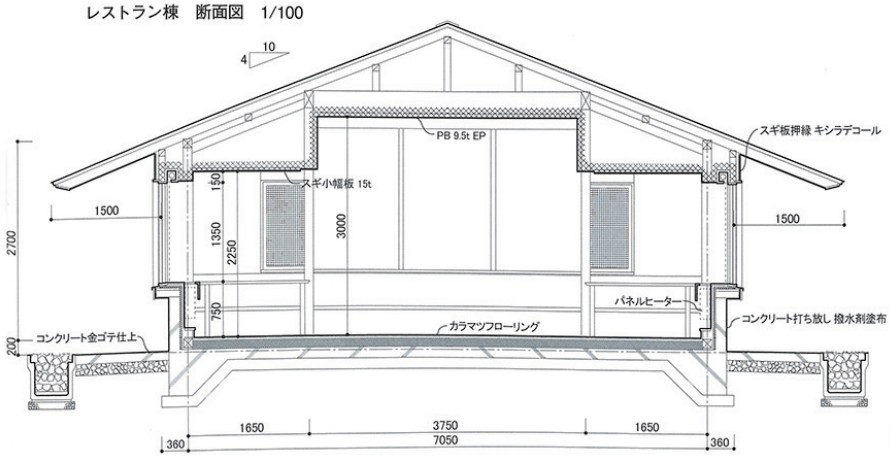
101室入口に向かう階段ホール

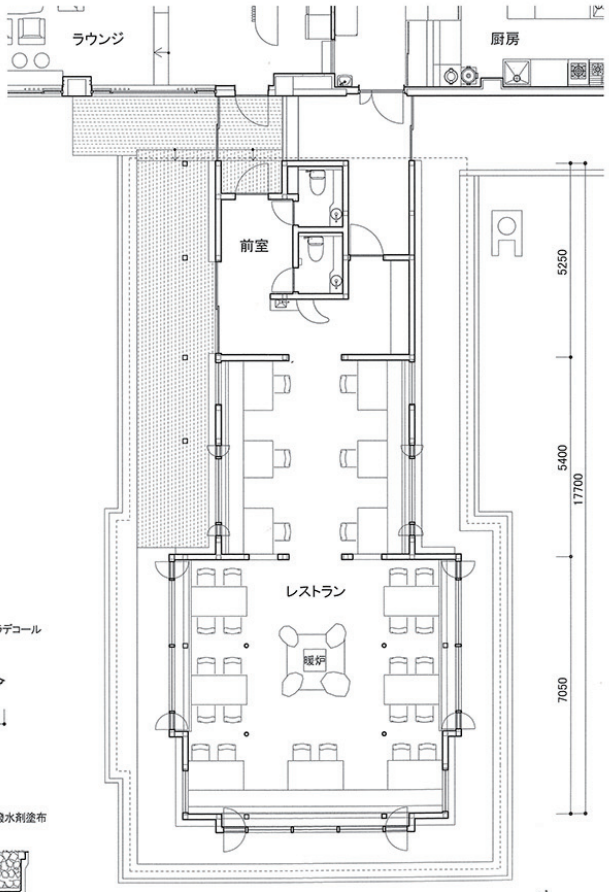


101室　平面図　1/100



レストラン棟　断面図　1/100

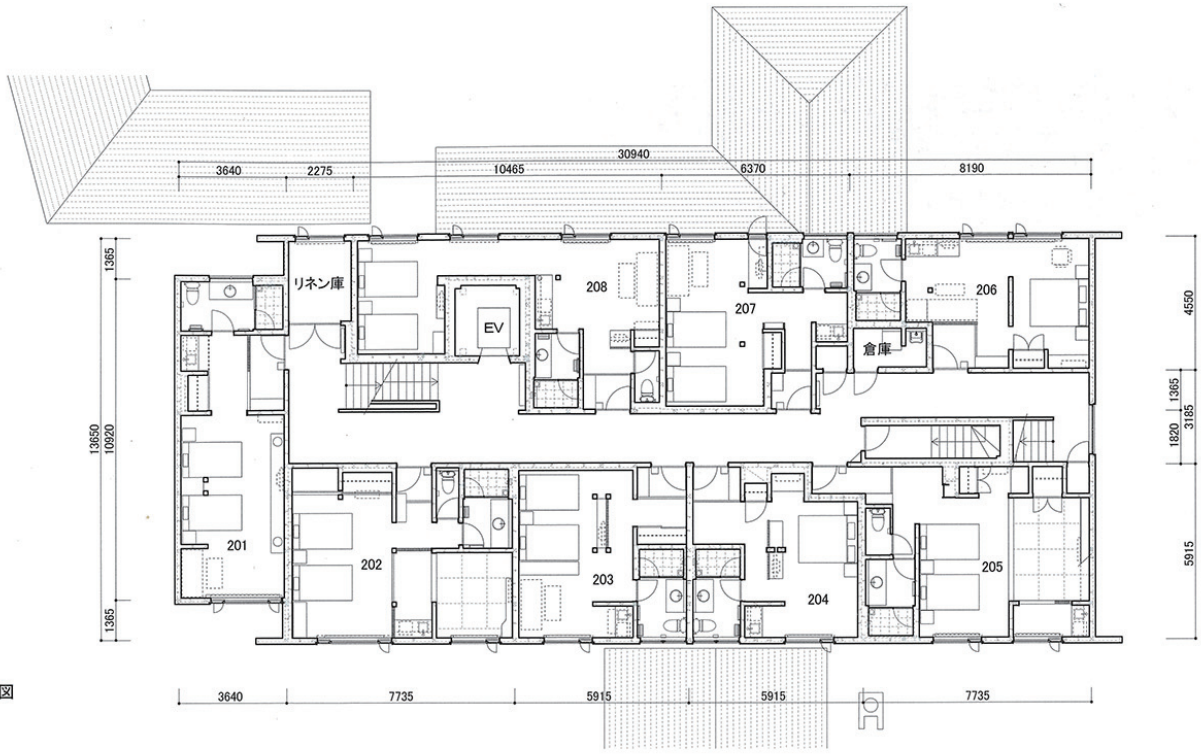




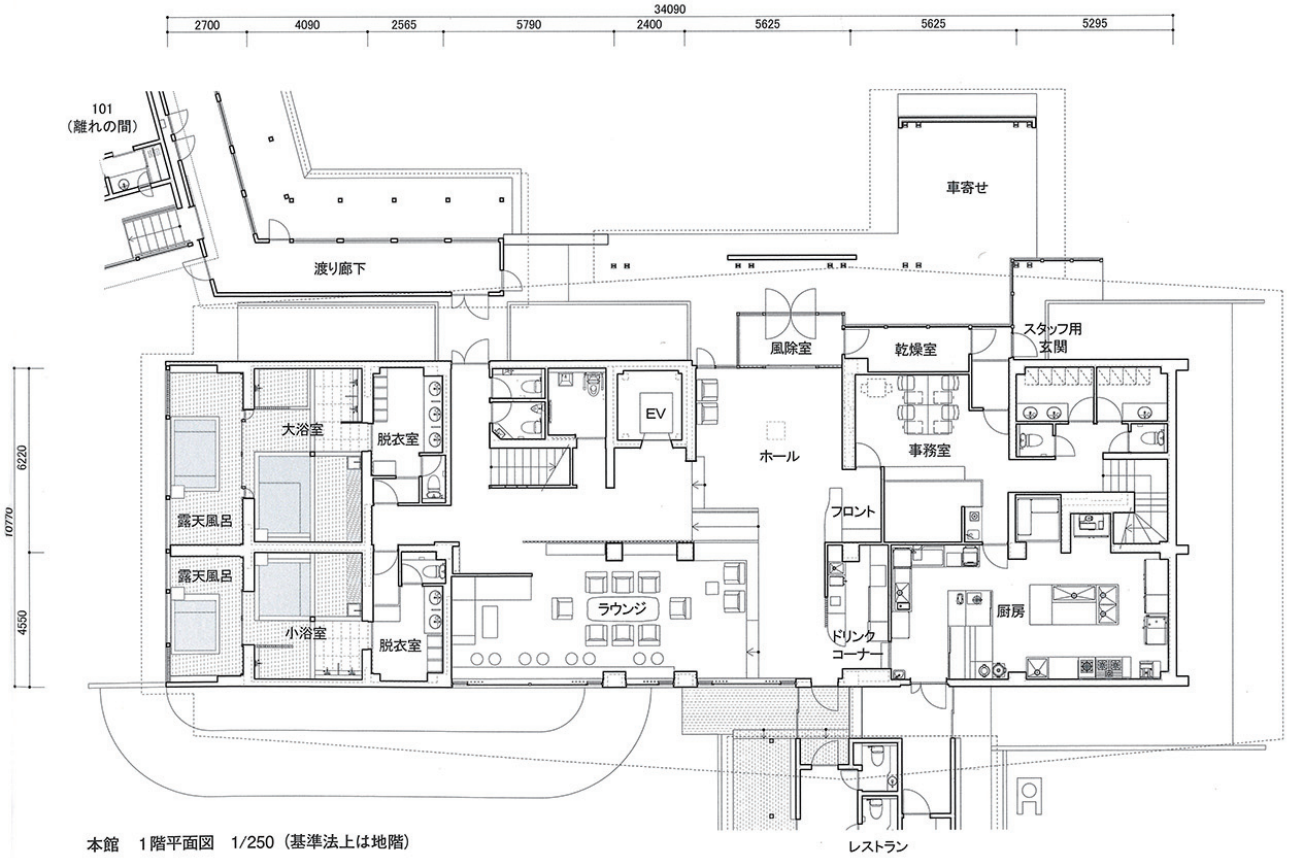
レストラン棟
平面図　1/200

右頁写真／レストラン内部。中央に磐梯山の噴火岩で囲む暖炉を設置した

上写真／ラウンジの横長窓。庭の向こうにレストラン棟を見る
右写真／レストラン入口。漆喰壁の小口には要所にコーナーガードを付け、アクセントともしている
左写真／レストラン内観。コードペンダントは楓薄板を貼ったオリジナルデザイン



2階平面図



本館　1階平面図　1/250（基準法上は地階）

地下1階地上2階建

●面積

敷地面積―22,491㎡

建築面積―1,137.6㎡

延床面積―1,268.5㎡（地階／345.1㎡　1階／681.0㎡　2階／242.4㎡）

建蔽率――5.06%（20%）

容積率――5.64%（40%）

地域地区―磐梯朝日国立公園、第二種特別地域

●主な外部仕上げ

屋根――フッ素鋼板横葺き

壁――杉板押縁

建具――アルミサッシ、一部木製サッシ

●主な内部仕上げ

天井――エントランス、ラウンジ／杉板不燃処理パネル材　客室／PB厚9.5㎜EP

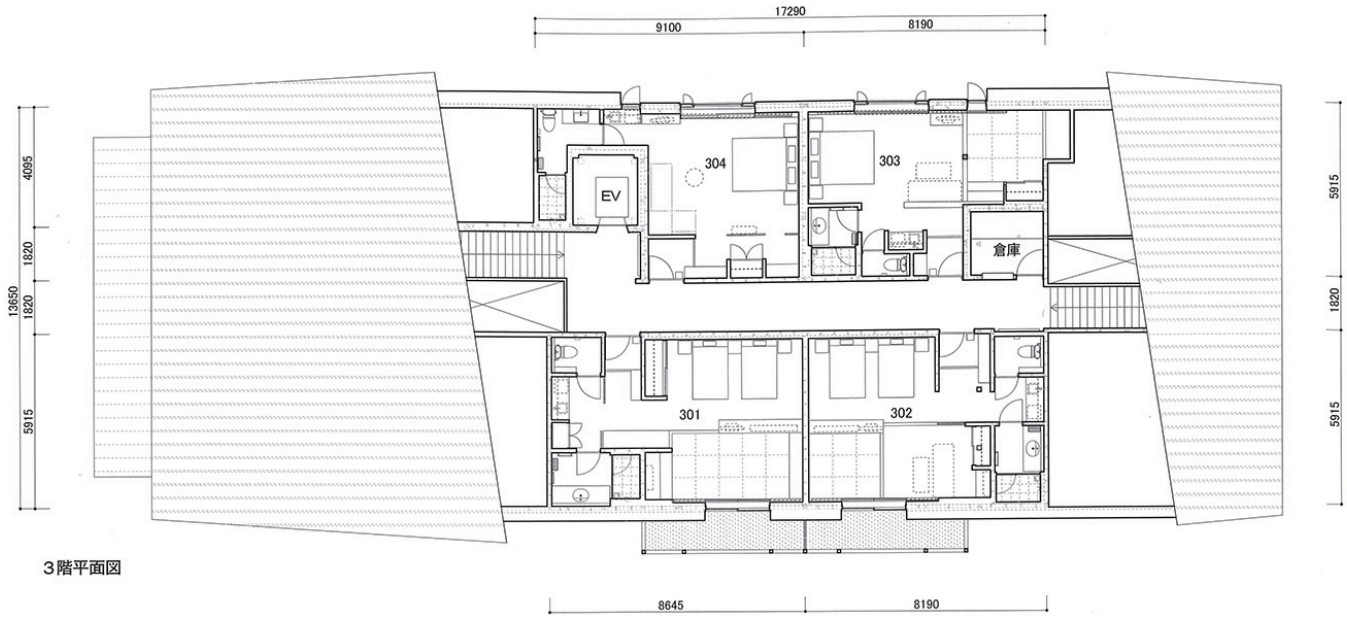
壁――エントランス、ラウンジ／PB厚12.5㎜ AEP　客室／PB厚12.5㎜漆喰塗り

床――エントランス、ラウンジ／セッ器質タイル　客室／キリ、カラマツ無垢フローリング

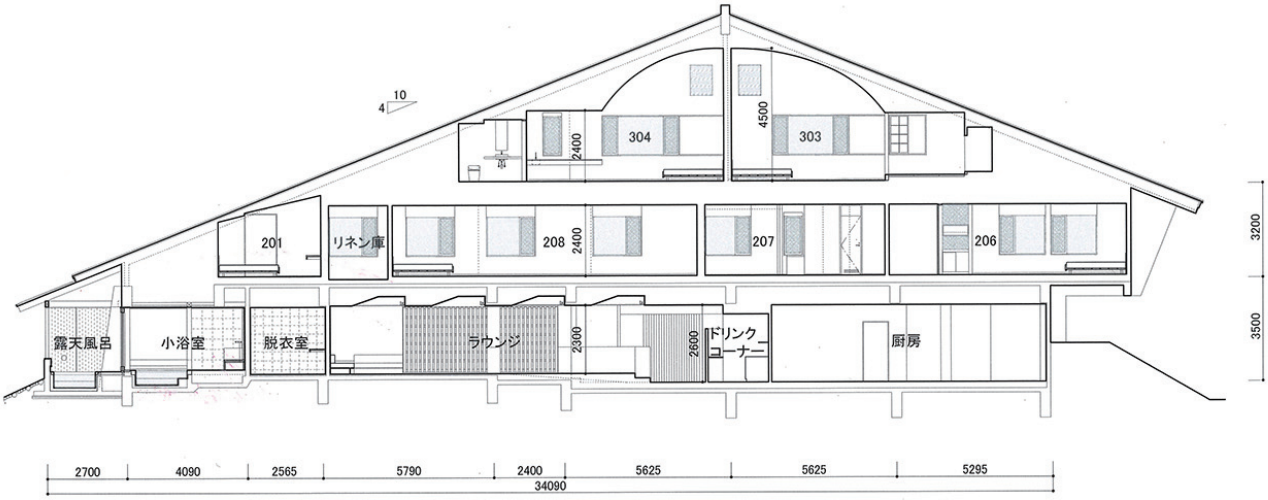
●設備

冷暖房――温水パネルコンベクター　ルームエアコン

給湯――中央方式（灯油焚きボイラー）



3階平面図



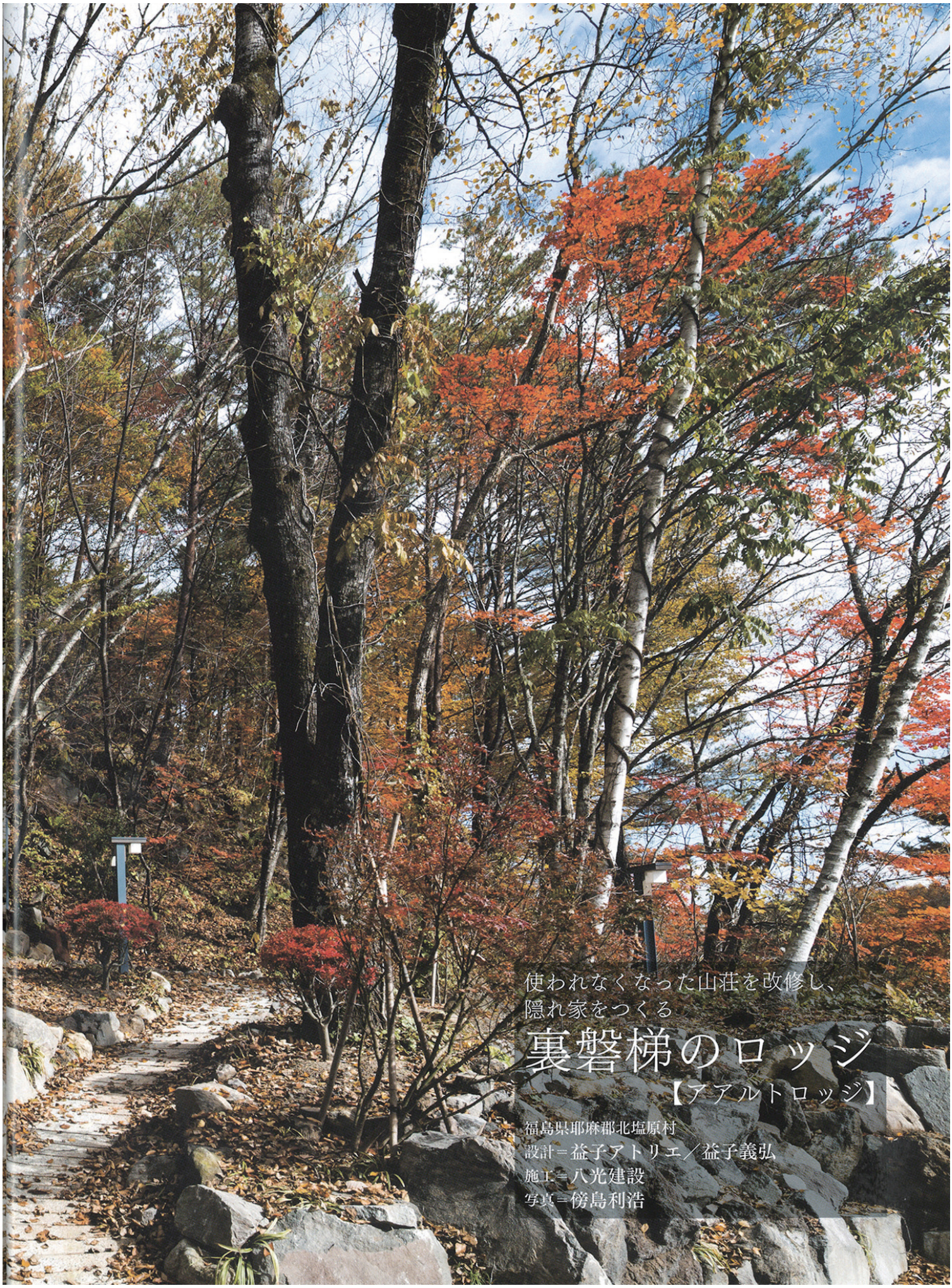
本館　断面図　1/250

大浴室。温泉は源泉かけ流し

北側外観。右手に離れの屋根が見えている

資料

●**建物名**—裏磐梯の小ホテル（ホテリ・アアルト）
所在——福島県耶麻郡北塩原村
●**設計**——益子義弘、河合俊和、大竹慎太郎、梅沢典夫
構造設計—サンミックス・システム、堀井勝典研究所
設備設計—電気／八島企画設計
機械／イズミ設計事務所
●**施工**——八光建設
全体統括／宗像剛
現場担当／櫛田吉伸、橋本晃一、岩渕絢一
家具調度／高橋邦明
設備／トーカイ工業
電気／エディソン
竣工——2009年3月
構造規模—鉄筋コンクリート造＋木造



使われなくなった山荘を改修し、
隠れ家をつくる

裏磐梯のロッジ
【アアルトロッジ】

福島県耶麻郡北塩原村
設計＝益子アトリエ／益子義弘
施工＝八光建設
写真＝傍島利浩

前出のホテルに付属するロッジとして、近くにある35年の時を経た山荘を改修したものである。過去に名のある特別な保存や修復に関わるような、そうした仕事ではない。壊して新たな造りで計画した方が設計はたやすかっただろうし、コスト的にもむしろ抑えられ、オリジナルなデザインになったとは思う。

改修に向かうひとつの伏線は、ホテルで経験した既存の骨格を「地」としてそこに新たな空間の「図」を読み解く面白さと、そうした読み解きを通して結果的にデザイン上自己完結的でない効果や発見があること。また、持続更新が可能なものはできるだけ生かしていこうとするオーナーと共の思いからだった。

鋭三角形の小屋型シルエットは、当時よく目にした山荘のスタイルだ。木立の風景に対して癖がなく、簡潔で適っている。この骨格をそのままに、内部の設えをいったん裸にして、いくらかの補強を施しながら新たな居場所や室の構成に読み替えることにした。

ロッジに期待されるのは、言うまでもなく内部の居心地の充足とともに、この周囲の自然と深く呼吸しあう場の設えだ。上の写真に見るスペースは、戸外の空気に浸って過ごせる場所を既存部に足した広めのデッキ部分である。ホテルでの経験で意外に多い滞在客からのクレームは虫に対するもので、時には蟻一匹の侵入に騒ぐ人もいると聞く。内心はこんな自然の環境に来て……と思わぬではないけれど、蚊や蛾の来襲はやはり気持ちが落ち着けない。このデッキスペースは周りを囲む格子内に目立たぬよう

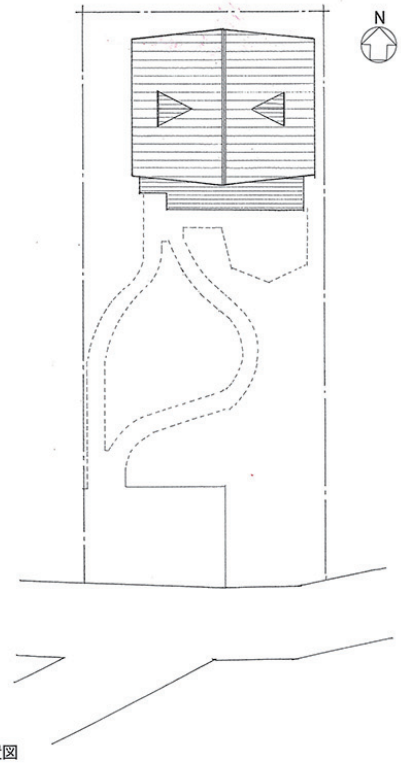
18頁〜19頁写真／南面外観。既存の骨格と外形シルエットを生かして、全体改修を行った
右写真／既存部に増設したデッキスペース。外周格子内に防虫網を仕込み、可動の網戸を設置して蚊や蛾の襲来を防ぐ。周辺に住むお猿さん避けでもある
上写真／網戸を脇に引き分けた状態

に防虫網を張り、引き網戸を添えて煩わされることなく静かに時を過ごせる場所とした。下を流れるせせらぎの音を聴き木々の香りに包まれるこの半戸外の空間が、ロッジで一番気持ち良い場になったかもしれない。

内部は小人数が適度に互いの間合いを持ちながら過ごせるよう、コンパクトに居場所をいくつか組んだ。これも改修という取り組みに伴う既存の骨格の中に多様な場を見出す発掘的な作業だったと言っていい。2階小屋裏のデッドスペースをベッドブースに利用したのもそんな一つで、片隅が意外な心地良さを生むことにあらためて気づく。広間の空間も思わぬ密度になった。

上階の水平窓からは木の間越しに磐梯の山容が望まれる。周囲の木立に対しては適宜小窓を切り、このひと時の過ごしの場にさまざまな環境との対話が生まれることを願った。

益子義弘



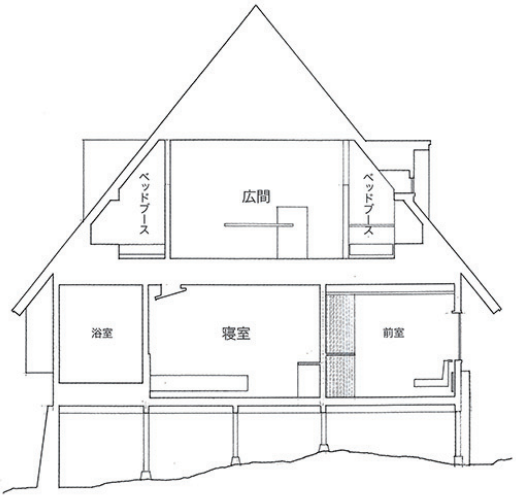
配置図

上写真／入口前室のソファーコーナー。持参の荷物の整理や寝室脇の憩いの室として使われる
右写真／前室、風除室側を見る
左写真／山の斜面に向く前室の窓。ソファー背面にパネルヒーターを設置

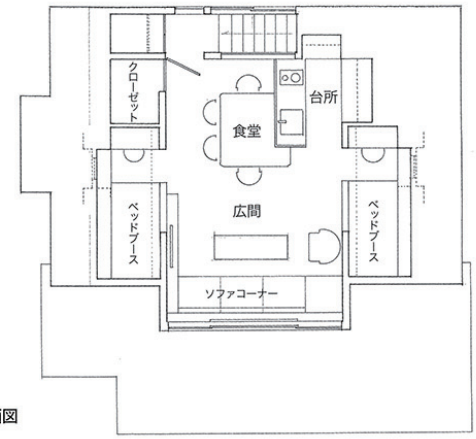
左頁
上写真／ベッドルームと南に連なるデッキスペース
下写真／周囲の木立に向けて二面を開放した浴室

右頁
上写真／2階の広間。食堂側からソファーコーナーを見る。両脇は屋根裏スペースを利用したベッドブース
下写真／居間から食堂・ミニキッチンコーナー側を見る

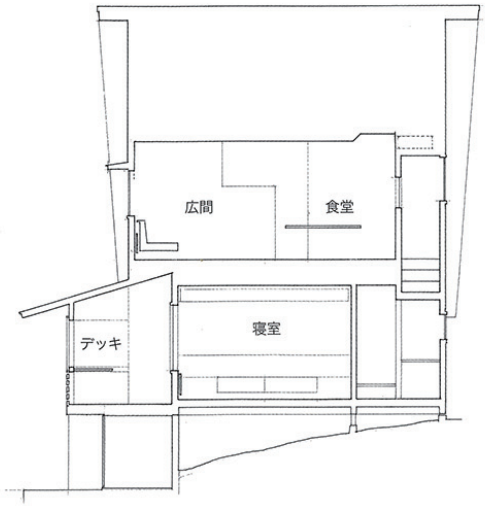
上写真／木漏れ日が入る広間東側
右下写真／磐梯山に向かう2階広間の窓。ソファーの背面にパネルヒーターを設置して窓面のコールドドラフトを和らげている
左下写真／広間の両脇のベッドブース。閉塞感を避けるよう屋根面に小窓を設けた

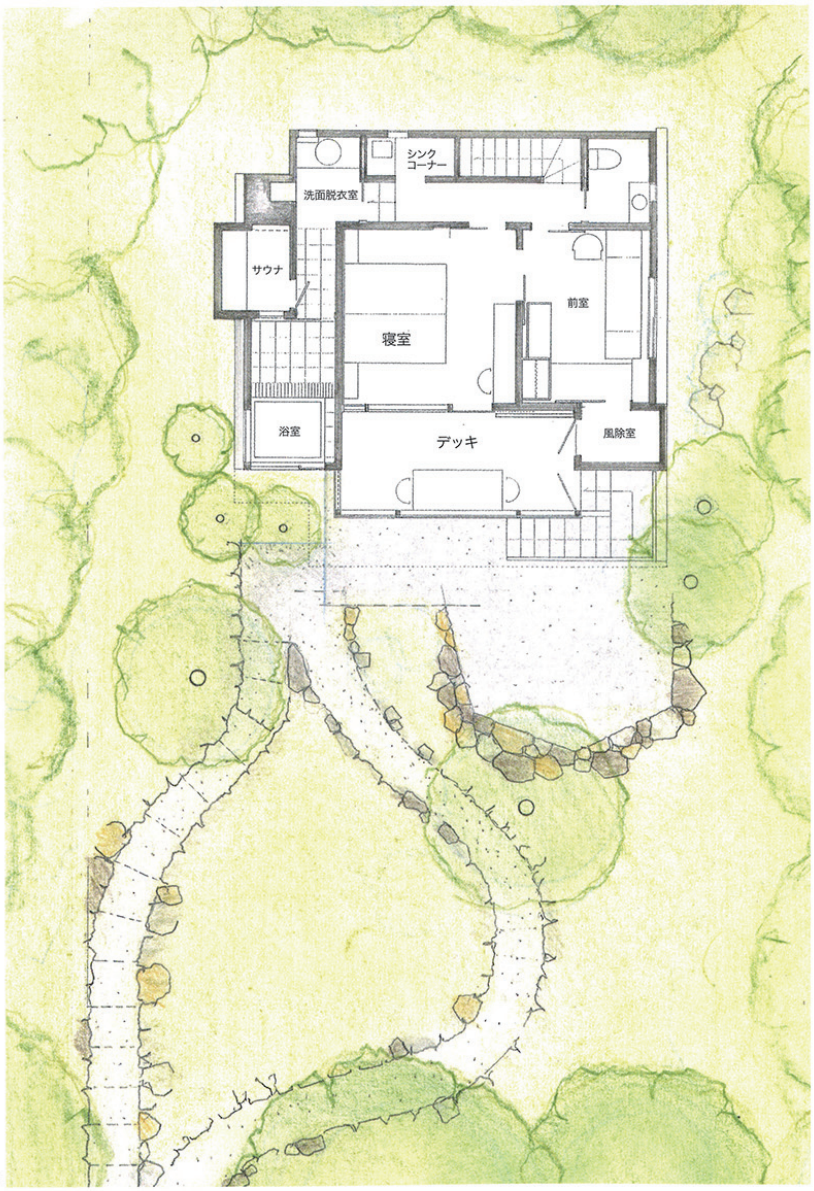


断面図　1/150



2階平面図





1階平面図　1/150

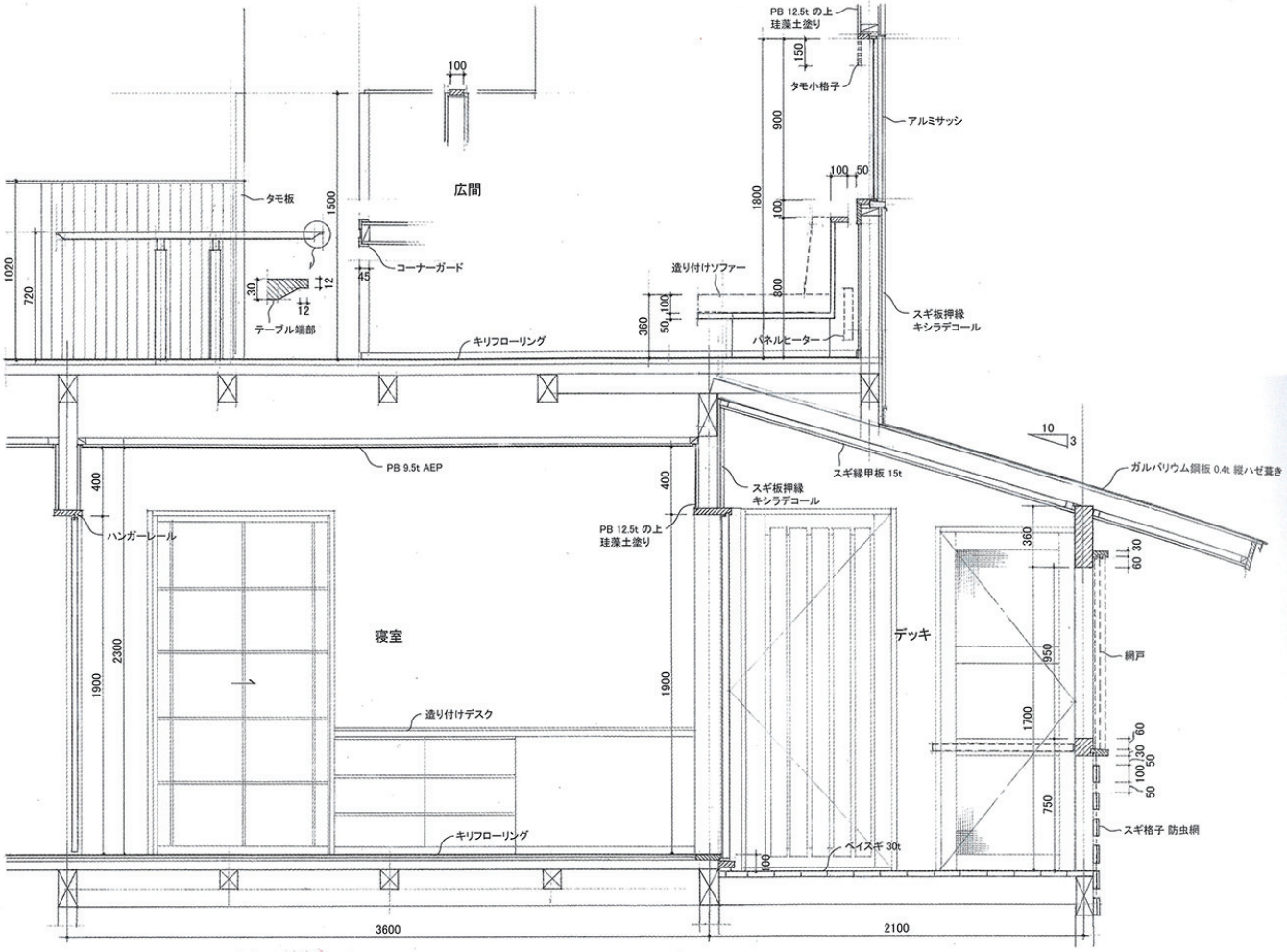
●面積
敷地面積―356㎡　建築面積―59.01㎡
延床面積―98.57㎡
（1階／59.01㎡　2階／39.56㎡）
建蔽率――16.5%（20%）
容積率――27.6%（40%）

地域地区―磐梯朝日国立公園、第二種特別地域

●主な外部仕上げ
屋根――ガルバリウム鋼板横葺き
壁――杉板押し縁、キシラデコール塗布
建具――アルミサッシ、一部木製サッシ

●主な内部仕上げ
天井――各室／PB厚9.5㎜AEP　浴室、サウナ／サワラ縁甲板
壁――各室／ PB厚12.5㎜珪藻土塗り　浴室、サウナ／サワラ縁甲板、腰壁：サーモタイル
床――各室／キリ無垢フローリング　浴室、サウナ／サーモタイル300㎜角

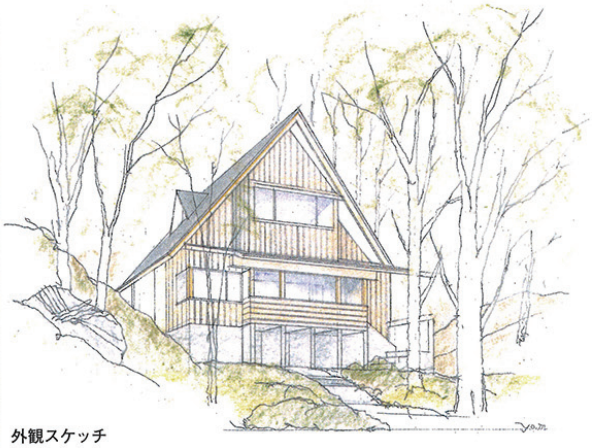
●設備
冷暖房――温水パネルコンベクター
ルームエアコン
給湯――灯油焚きボイラー



断面詳細図　1/40

右写真／改修前の小屋の外観　写真＝益子義弘
左写真／踏み面がコンクリート洗い出しの階段

右頁写真／階段を見上げる



外観スケッチ

資料

●**建物名**—裏磐梯のロッジ（アアルトロッジ）
所在——福島県耶麻郡北塩原村
●**設計**——益子アトリエ（担当：益子義弘、宗像秀展）
●**施工**——八光建設
現場管理／八光建設（橋本正博）
大工棟梁／橋本建築（橋本匠）
左官／日下部左官工業所（日下部高之）　塗装／熊田塗装（熊田稔）
建具／太斎木工所（斎藤豪）
板金／M・R・C大山（大山司）
設備／福島ファイブ工業（斎藤秀樹）
電気／光健電気（佐々木忍）
防水／福島防水（石田超）
竣工——2016年11月
構造規模—木造2階建